

# ヒトラーの政治哲学

石 井 貫太郎

## 目 次

1. はじめに——英雄と悪役の間
2. ヒトラーの生涯
  - (1) 救国の英雄政治家
  - (2) 20世紀最大の悪役政治家
3. おわりに——政治家・ヒトラーの評価

### 1. はじめに——英雄と悪役の間

20世紀における悪役政治家列伝の筆頭者としてヒトラーを取り上げることに、おそらく万人に異論がないであろう。<sup>1)</sup> それほど、ヒトラーという人物の「悪役」としての世間的なイメージは定着したものであり、また、同時に、その学術的、特に、歴史学的な評価も「定説」となっている。実際、英雄であると悪役であるとを問わず、20世紀に輩出した世界の政治家たちの中で、ヒトラーほど稀代の運命をたどった人物は皆無に近い。また、その評価が「悪役」として定着しているにもかかわらず、これほどの永きにわたり、多くの人々の記憶や興味に鮮明な足跡を遺している政治家もまた、皆無に近いといわねばならない。その意味で、やはりヒトラーは、他の悪役政治家たちと比較しても、とびきりの「大物」の悪役であることに疑いの余地はないであろう。すなわち、ヒトラーは、いうまでもなく20世紀最大の悪役政治家なのである。<sup>2)</sup>

しかしながら、ヒトラーという政治家はまた、このような悪役としての側面だけではなく、少なくともある一定の期間においては、祖国ドイツの国民にとって、また、その同盟国であった日本やイタリアなどの諸国民にとっては、救国の英雄であり、新しい時代の到来を体現する象徴的な存在としての意義を有する政治家でもあった。おそらくは、ヒトラーの「悪役」としての定評の核心的な部分は、ナチス・ドイツがユダヤ人虐殺という愚行を犯した際の最大の責任者であったという点に集約されるのであろうが、しかし、そうした事実認識を踏まえた上でも、なお、ヒトラーは、芸術の都ウィーンで美術学校の受験に二度も失敗し、夢破れて街をさまよい歩く浮浪者＝ホームレスの身から、ドイツという一国の頂点に上り詰め、そして、一時は全ヨーロッパの支配者になってしまうという歴史上稀に見る立志伝中の人物であり、当時、世界の多くの人々の期待を一身に背負った夢の時代を作り上げることに成功した人物でもあったのである。また、ヒトラーが作り上げたナ

チス・ドイツ時代のファシズム体制は、政治宣伝＝プロパガンダに惑わされた国民が民主主義を衆愚政治化する危険性を立証した事例としての重要な政治学的意義を提供する題材でもあり、普通選挙制度の実現によって作り上げられた大衆社会が、独裁体制の温床となり得る危険性を後の世に知らしめた貴重な人類の体験でもあったといえるのである。

さて、この論文では、悪役政治家としての史上空前の歴史的定評を付与されているこの不可思議な人物の足跡をたどりながら、現代政治における英雄と悪役という問題について考えてみたいと思う。なお、ヒトラーについては、日本でもNHK及びNHKエンタープライズ編集のDVD『映像の世紀（第4集）・ヒトラーの野望——人々は民族の復興を掲げたナチス・ドイツに未来を託した』（NHKソフトウェア、2000年）などをはじめとして、膨大な映像記録が残されている。また、『ゲゲの鬼太郎』で知られる著名な漫画家である水木しげる氏の手による名作『劇画・ヒトラー（復刻版）』（実業之日本社、2003年）など、日本が世界に誇る文化の一つである劇画や漫画による記録も残されているので、それらの資料も参照しながら、以下の記述を展開していきたいと思う。なお、事実関係の記述については、三省堂編修所編『コンサイス世界人名事典（第3版）』（三省堂、1999年）によった。

## 2. ヒトラーの生涯

### (1) 救国の英雄政治家

#### ① 夢多き青年時代

1889年4月20日、ヒトラーは、オーストリア・ハンガリー帝国の税関吏をしていた父・アロイスと、母クララの第4子として、オーストリア北部の国境の町・ブラウナウに生まれた。ヒトラーが3歳のとき、一家はパウサに転居し、さらに6歳の時には、リンツ近郊のハーフェルトへ移り、1895年、ヒトラーは同地のフィッシュルハム小学校に入学した。意外にも、当時から弁舌さわやかな利発な子供で、成績は優秀であったという。

当時、ヒトラーは画家になることを夢見ていた。しかし、実直な役人であった父アロイスには、その希望は到底受け入れることができなかった。1900年、ヒトラーは、役人の職に就けなかった父の強硬な反対を押し切り、リンツ州立実科学学校に入学した。しかし、自分に興味のないことには精を出さないという生来の気性がたまって留年を繰り返し、シュタイエル実科学学校に転校するも、結局、ここも中退することになった。

1903年1月、ヒトラーが13歳の頃、父アロイスが、飲酒中に卒中で倒れて死去した。父の重圧がなくなったヒトラーは、その後、気ままな青春時代を送り、ワーグナーの楽劇に心を奪われる毎日を送った。しかし、その頃、母クララのガンが発病している。芸術家としての名声を夢見ていたヒトラーは、1907年10月、ウィーン美術大学の試験を受け、1次試験は合格したものの、2次試験のデッサンでは最低点で落第してしまい、彼の自尊心は大きく傷つけられてしまった。

1907年12月21日、闘病生活を送っていた母クララが、ついにガンで死去した。診療・治療・死亡確認をしたプロハ博士は、「多くの臨終を見たが、彼ほど悲しんだ者を見たことがない」と後に語っているように、ヒトラーは、その母の死を大変悲しんだ。1908年9月、ヒトラーは再び画家を目指して、勇躍、再度のウィーン美術大学への受験を敢行するが、またもや不合格となり、以後、彼はいわゆる「芸術的画家」を夢見てウィーンの街で放浪生活を送ることになった。

## ② 勇敢なる兵士

1913年、24歳になったヒトラーは、オーストリア・ハンガリー帝国の徴兵を忌避するため、ドイツのミュンヘンに移住し、住居のデザインなどを担当する建築コンサルタント業を営んでいた。しかし、1914年1月18日、ヒトラーは、ミュンヘン治安警察によってオーストリア領事館に連行されてしまう。ここで、強制的に徴兵検査を受けさせられたヒトラーは、しかし、身体虚弱（栄養失調）のため不合格となり、徴兵を免れることになった。

ところが、同年8月1日、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世がロシアに対する総動員令を発令し、ドイツが第一次世界大戦に参戦すると、ヒトラーはバイエルン王ルードヴィヒ3世に軍隊への志願文書を提出し、オーストリア国籍のまま、ドイツ帝国陸軍第1バイエルン歩兵連隊に入隊する。すぐさま第2バイエルン歩兵連隊（訓練部隊）に転属し、次いで、第16バイエルン予備歩兵連隊に配属され、第一次世界大戦に従軍し、イープルでの戦闘に参加する。ここで、ヒトラーが軍隊へ入るに至るまでの一連のいきさつは、彼がハプスブルグ帝国のために戦うことを良しとせず、あくまでもドイツのために戦う人間であったことの証拠として語られることが多い。

兵隊となったヒトラーは、誠に勇敢な戦い振りを見せた。1918年8月4日には、その勇敢な戦功を認められ、功一級鉄十字勲章を授与されている。これは、彼がたった一人で10数名におよぶフランス兵捕虜を捕獲してきた功績によるものとされているが、真相は定かではない。ちなみに、彼は、生涯この鉄十字勲章をこのなく愛し、総統になってからも勲章を佩用する機会がある場合には、必ずこの勲章を着用したという。ただし、ヒトラーは4年間の軍隊勤務で、伍長までにしか昇進できなかった。ちなみに、これは下士官の中堅階級であり、その軍務期間から考えても、当然、曹長＝分隊長クラスまで昇進してもおかしくなかった。その一因として、彼が一般兵士と打ち解けずにいるということや、ドイツ国籍を有していなかったからという説があるが、こちらの方も定説はない。いずれにしても、後年示された彼の気性から考えて、上官からすれば非常に扱いにくい部下だったには相違ないであろう。1918年10月14日、ヒトラーは、塹壕でイギリス軍の毒ガス攻撃を受けて一時的に失明し、パーゼヴァルクの陸軍病院への入院を余儀なくされ、そのままドイツの敗戦を病院で迎えることになった。

## ③ 政治家への道

退院したヒトラーは、第2バイエルン歩兵連隊に配属され、その後、ミュンヘンのバイエルン第7師団政治局啓発課に移ることになり、ここで政治教育将校となった。彼は、兵士たちを扇動し、

共産主義の浸透を防止するためのプロパガンダ＝政治宣伝の任務をいい渡されたのである。1919年の秋頃、ヒトラーは、上官から、当時のドイツに多数存在していた小政党に対するスパイ活動を命じられ、ある時は社会民主党、また、ある時はドイツ労働者党に潜り込むなどして諜報活動に従事した。その後、ヒトラーは、自分が調査していた小政党の一つであるドイツ労働者党に入党した。入党後のヒトラーは、どの党员よりも熱心に政治活動に従事したという。

1920年、ヒトラーは、政治活動に専心するため、陸軍を除隊した。同年4月1日、ドイツ労働者党も国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス）に名称変更され、ここにいよいよナチス党が誕生することになった。翌1921年、ヒトラーはナチス党の党首に就任し、持ち前の弁舌を駆使したその演説の魅力で、急速に支持者を増やしていった。ナチス党のトレードマークとなるカギ十字の紋章も、この時期に採用されている。また、ここで彼は、後の副総統ヘス、空軍大臣ゲーリング、宣伝大臣ゲッベルスなどの盟友たちと共に、いずれ党内最大の政敵となるシュトラッサーやレームなどとの知己を得ていくのである。

1923年11月、ヒトラーは、ミュンヘンでワイマール体制打倒の活動を旗揚げし、第一次世界大戦の英雄・ルーデンドルフを立てて、いわゆるミュンヘン一揆を起こす。この一揆は間もなく鎮圧され、クーデターは完全な失敗に終わった。こうした実力行使の失敗という経験が、ヒトラーに、プロパガンダを通じた平和的手段による政治活動への目を開かせることになる。ヒトラーは、一揆の首謀者として禁固五年の刑を宣告され、ランズベルク刑務所に投獄されるが、1924年2月から始まった裁判において、法廷をも自己宣伝の舞台として利用し、刑務所内でも「名士」としての特別待遇を受けていた。近隣住民の証言によれば、副官一人をともなった署長とヒトラーの3人が、刑務所の外のカフェで政治談義などをしている姿が目撃されている。この時期、すでに彼はドイツ国内でも相当な著名人となっていたのである。また、獄中でもルドルフ・ヘスをともなった口述筆記により、有名な著書『わが闘争』も完成させている。<sup>3)</sup> ちなみに、この著書の中にある生活圏（レーベンスラウム）思想と、ゲルマン民族を中心とするアーリア人種優越論に基づいて、後年、ヒトラーは、世界大戦とユダヤ人虐殺を遂行していくことになるのである。結局、1924年12月20日、ヒトラーは政治家生活を遂行して、わずか9ヶ月の受刑で釈放された。

翌年、ヒトラーはナチス党への再建に乗り出した。一揆失敗の反省から、非合法的活動を止め、過激な急進運動から大衆運動への転換、すなわち、選挙を通じて合法的に権力を奪取する方針へとナチス党を変換させていき、党勢を拡大した。大衆への積極的なプロパガンダが効を奏し、ナチスの人気は徐々に高まっていった。当時、ベルリンのガウライター（ナチス党の地区政治活動の担当者）であり、党の宣伝戦略の総責任者であったゲッベルスの天才的な魔術が、国民をマインド・コントロールしていくのにそれほど時間はかからなかった。

#### ④ ワイマール共和国首相

1929年10月、ニューヨーク株式市場の株価の大暴落に端を発した世界大不況による世情の不安定も手伝って、ヴェルサイユ体制の打破を唱えつつ、ワイマール政府を攻撃するナチス党のストレー

トな主張が国民の興味を引き付けた。1930年9月の総選挙では、ナチス党は107議席を獲得し、社会民主党に次ぐ第二党にまで躍進した。また、1932年7月の選挙では230議席を獲得するに至り、第一党となっている。こうした勢いを駆って、1925年にオーストリア国籍を離脱していたヒトラーは、1932年2月にはドイツ国籍を取得し、ワイマール共和国の大統領選に出馬した。しかし、現職で、第一次世界大戦の英雄であったパウル・フォン＝ヒンデنبルクと争い、決選投票の末に敗れてしまう。こうした情勢下にあって、1930年から1932年にかけてのワイマール共和国の内閣はめまぐるしく交代し、そのため、世界大恐慌に対する有効な手段を講ずることができず、議会政治も空転し、大統領ヒンデنبルクの非常権限で、やっと統治を継続している有様であった。国防軍の将軍であった軍人政治家・シュライヒャーの暗躍や、ナチス党内最強の反ヒトラー勢力の大物であったシュトラッサーとパーペンの密約、ワイマール共和国の最後の理性といわれたエーベルトの活動など、様々な政治家たちが活躍し、この時代のドイツ政治を彩った。

さて、このように、ヒトラーは、一方では、大恐慌によるドイツ国内の政治的および経済的な変動の中で、一部の独占資本からの支援と民族主義的および社会主義的なデマゴギーによってファシスト大衆運動家として勢力を拡大し、また、他方では、ナチスの私設武装集団であったレームの率いる突撃隊（SA）やヒムラーの率いる親衛隊（SS）による共産党や労働組合へのテロ活動を強化しつつ、着実にその政治勢力を伸ばしていった。このような勢いに乗じて、ナチス党は、1933年1月30日、ヒンデنبルク大統領に掛け合い、遂にヒトラーを首相に任命させることに成功した。

首相となったヒトラーがまず手をつけたのは、国内の政敵を粛清・弾圧することであった。国会議事堂の火事を共産党の仕業であると決め付け、国内最大の反ヒトラー主義者である4000人もの共産党員や自由主義者を逮捕した。また、一部独占資本からの多額の選挙資金を得たナチス党は、国民に対する大々的な選挙宣伝を敢行し、1933年3月5日の総選挙において288議席＝総得票の実に44%を獲得し、これに国家人民党の53議席を加えて過半数の議席を占め、議会においてもその政治的基礎を磐石なものとするに成功した。この時点で、ヒトラーは、ナチスによる「世直し運動（国民革命）」の終了も宣言した。この時、ヒトラーは、ドイツ国民にとって、まぎれもなく救国の英雄であった。そして、それは、芸術家としての夢破れた一人の名もない浮浪者が、自己の過酷な運命に対して果敢に挑戦し、遂に一国の頂点にまで上り詰めた歴史的な瞬間でもあったのである。

## (2) 20世紀最大の悪役政治家

### ① 第三帝国総統

1933年3月、ヒトラーは、自分が政権を担当する向こう4年の間、憲法改正をともし、また、大統領権限を侵さない限りにおいて、ヒトラーに自由に法律の制定を認めるという世界史上悪名高き「全権委任法」を、賛成442票対反対84票で可決させてしまった。この権限に基づき、ヒトラーは、すぐさまナチス党以外の一切の政党を禁止し、当時のドイツの封建的な連邦国家を廃して、強力な中央集権国家体制を実現した。また、一方で、対内的にドイツ民族を国家社会主義の中に包括

させるとともに、他方では、対外的に連合国に対して軍備の平等権を要求し、国際連盟やジュネーブ軍縮会議を脱退した。こうした一連の行動は、ヒトラーのあからさまなヴェルサイユ体制への反発であったが、しかし、当時のドイツ国民の大多数は、彼のこうした政策を熱狂的にまで支持したのであった。

1934年6月30日から7月2日のいわゆる「長いナイフの夜」において、ヒトラーは、レームを始めとするSAの幹部を、SS隊員を使って逮捕拘禁、処刑させた。これは、ヒトラーが、元来、私的な軍隊として創設されて以後、急速に暴力団化していった突撃隊と、プロイセン以来の伝統ある正規軍としての誇りを持つ国防軍とが少なからず確執状態にあることを知り、近代戦を勝ちぬぐために後者の協力が必要不可欠であると決断して行なわせしめた粛清であった。そして、そのような政治的都合から、レームなど、ヒトラーが政治家を志して以来の多くの盟友たちに手にかかることになったわけである。

同年8月2日に、ヒンデブルク大統領が86年の生涯を終えると、ヒトラーは国民投票を行い、ドイツ国家元首に推挙され、首相と大統領を兼任して、史上空前の絶対権力を手中に収めた。ドイツ国民は皆、彼を民族の指導者として総統（フューラー）と呼ぶようになった。ドイツの古都ニュルンベルクでは、ナチス党の記念の党大会が開催され、「一つの民族、一人の総統、一つの帝国」という有名なスローガンが生まれた。

さて、ドイツにおいて、このようにヒトラーの独裁体制が成立していく一方で、隣国イタリアで一足先に独裁体制を固めていたムッソリーニは、オーストリアに勢力を拡大し、同国のドルフス首相にオーストリア・ナチ党を弾圧させたりしていた。これに対して、オーストリア・ナチ党は同首相を暗殺し、クーデターを起こした。ヒトラーは、この事件がドイツとは無関係であることを世界に宣言する一方で、ドイツの「生存圏」獲得には力（ゲバルト）の行使以外にないと自覚し、1935年3月、ヨーロッパの列強に向かって再軍備を宣言した。これは、ヴェルサイユ条約に対する公然たる挑戦であった。

そして、遂にヒトラーが、その実力を実際に行使する時がやってきた。イタリアのエチオピア侵略に対する英仏の弱腰外交を見たヒトラーは、1936年3月、フランスとの国境にある国際連盟で定められた非武装地帯のラインラントに軽武装の軍隊を進駐させたのである。この時、内心ヒトラーは、フランス軍からの攻撃を恐れ、後に「ラインラント進駐後の48時間は、私の生涯で最も神経を消耗した時間であった」と語ったという。当時、国内問題に忙殺されていたイギリス政府やフランス政府は、いずれも効果的な軍事的対応ができず、ヒトラーの賭けは大成功に終わった。この時代、ファシズムはドイツやイタリアだけの現象ではなく、フランスでは火の十字団のテロ活動が活発化し、イギリスではオズワルド・モーズリーによる過激な右翼活動が始まり、アメリカでさえナチス党支部が設立されるほど、各国のファッショ熱の盛り上がりがあり、他人の国よりも自分の国のことで精一杯であったといえる。

このように、ヒトラーは、近隣諸国に対する強圧的な外交政策を遂行する一方で、政権担当者として、ドイツの国威発揚とゲルマン民族の精神的復活とを梃子に、祖国の再建を目指した。また、

公共投資を通じた経済活動に対する政府の介入を拡大させ、経済発展、特に失業者対策に力を傾注した。<sup>4)</sup> 他方では、有給休暇制度（メーデー）の実現、高速道路（アウトバーン）の建設、国民車（フォルクスワーゲン）構想の展開などの娯楽を国民に提供し、自身の政権の基盤を強化することにも余念がなかった。ちなみに、1936年8月に開催されたベルリン・オリンピック大会もその一つであり、巨費を投じた競技施設や五輪史上初の選手村の設営、開会式に始まる大会期間中の華麗な演出など、戦前最後の大会となった同オリンピックはまた、「ヒトラーのオリンピック」とさえいわれたのである。

同時に、この間、ヒトラーはスペイン内戦（1936年）にも介入し、当地の独裁者・フランコ將軍を援助している。有名なピカソの「ゲルニカ」に描かれた街の惨劇は、ドイツ空軍による爆撃で消滅した同市の姿が描かれた作品であるが、ヒトラーが支援したフランコは、後にスペインに完全な独裁体制を敷き、第二次世界大戦も、実に40年以上にわたってその体制を維持することになる。

さて、ラインラントを手中に収めたヒトラーは、次に、その野心をオーストリアへ向けた。オーストリアはヒトラー自身の生まれ故郷であり、その領土的執着には強いものがあったという。そして、1938年、オーストリアは一発の銃声もなくドイツに併合された。この事件を受けて、ドイツのこうした一連の拡張政策を危惧した当時の世界大国であったイギリスや、大陸ヨーロッパにおけるドイツのライバルであったフランスなどのヨーロッパの強国たちは、同年にミュンヘン会談を持ち、ヒトラーと交渉した。しかし、第一次世界大戦の悲劇が今だ冷めず、続く大恐慌で経済が破綻し、国内問題に足を取られている各国の指導者たちは、厭戦気分の強い世論に押されて宥和政策しか採用することが出来ず、結局、ドイツの希望通りに現状を容認するミュンヘン協定が成立した。

1939年、こうした英仏の弱腰外交を見ぬいたヒトラーは、すぐさまチェコ・スロバキアへ軍事的かつ政治的な圧力をかけてこれを解体し、事実上のドイツへの併合を行った。これに対して、同年4月、これ以上のヒトラーの領土的野心に歯止めをかけるため、チェコの隣のポーランドとイギリスが軍事協定を締結するが、しかし8月23日、ドイツとソ連もまた、これに対抗して独ソ不可侵条約を締結していた。そして、この条約には秘密議定書がついており、互いにポーランドを分割することになっていた。かくして同年9月1日未明、ドイツはポーランド侵攻を開始し、一方、ポーランドと同盟関係にあるイギリスとフランスは9月3日、ドイツに宣戦布告をし、ここに、第二次世界大戦が開始されることになった。

## ② 第二次世界大戦

大戦の初期、ドイツ軍は、電撃的なスピードでポーランドを粉砕した。このいわゆる電撃戦（ジークフリート）は、ヒトラー自身の指導の下、ドイツ軍が世界に先駆けて作り上げた戦車や装甲車を主役とした機構師団（パンツァー）と、ゲーリングの指導の下で創設されたルフト・ヴァッフェ（空軍）の力によるものであった。ドイツに西側から攻め込まれたポーランドには、そこへ同時に東側から200万のソ連軍がなだれ込み、西部戦線に気を取られていたポーランドは、一発の弾丸も撃つことなくソ連に東側半分の国土を占領された。ここに、ドイツとソ連によるポーランド分割が

成功し、世界史上3度目のポーランドの消滅が完成した。

次に、ヒトラーは、1940年4月9日に「ウェーゼル計画」(対北欧作戦)を発動し、デンマークとノルウェーへ侵攻し、これを占領した。さらに5月10日、ヒトラーは、「黄色作戦」(対フランス戦)を発動し、ドイツ軍は雪崩のごとく中立国ベルギーに侵入し、さらに、オランダにも殺到してフランスを威嚇した。また、6月10日には、ムッソリーニの率いるイタリアもドイツ側同盟国として参戦し、すでに西部戦線でドイツ軍の機甲師団に無人の野を行くがごとくに攻め込まれていたフランスは、ついに首都パリの防衛をあきらめ、ドイツ軍はパリに無血入城した。6月21日、第一次世界大戦でドイツが降伏調印したコンピエーニュの森で、仇討ちを果たした感涙にむせぶヒトラーが出席し、今度はフランスの降伏調印が行われた。この時、ヒトラーは、先の大戦でドイツ代表が降伏調印させられた客室列車を博物館の展示所から運ばせて、フランス代表に降伏調印をさせたという。当時のドイツ人のフランスに対する恨みの強さが偲ばれる逸話であろう。

さて、ヒトラーのドイツがフランスを降伏させた頃、一方で、スターリンの率いるソ連は、バルト三国及びルーマニアを併合していた。これを見たヒトラーは、ソ連の勢力拡張を危惧して再度イギリスに和平を提案するが、当時のチャーチル首相につっぱねられてしまう。そこで、海軍力の不足を認識しながらも、ヒトラーは遂に「あしか作戦」(対イギリス作戦)を発動し、かくしてバトル・オブ・ブリテン(英国の戦い)が開始された。しかし、空軍大臣ゲーリングに率いられたルフトバッフェは、確かに名戦闘機・メッサーシュミットや名爆撃機・ユンカースなどを擁する当代随一の空軍ではあったが、チャーチルによる挙国一致体制の下、アメリカからの援助を受けてイギリスは名機・スピットファイアを開発・実戦投入するなど、よくこの攻撃に耐え、戦局は次第にドイツに不利に傾きつつ、侵攻の成果が上がらないままにこの作戦は延期せざるを得なくなった。しかしながら、イギリスを取りこぼしたとはいえ、この時、ドイツはほとんど全ヨーロッパをその支配下に置く世界大国としての状況を実現し、ヒトラーは、文字通りその頂点に君臨するヨーロッパの覇者となっていたのであった。

### ③ 夢の終末

さて、ヒトラーは、アメリカのルーズベルト大統領がイギリスに対して全面的かつ本格的な武器供与をする約束をした事実を知ると、日本との協定の強化を考えるようになった。一方、日本もまた、ドイツのヨーロッパ征服の実績を高く評価していたため、ここに1940年9月27日、ベルリンで日本の来栖大使、ドイツのリッペントロップ外相、イタリアのチアノ外相により、先に締結された防共協定を発展的に継承する「日独伊三国軍事同盟」が調印された。この同盟を梃子として、翌1941年6月22日、ついにヒトラーは対ソ連戦＝「バルバロッサ作戦」を開始し、ドイツの誇る機甲師団と数百万の陸戦部隊がロシア平原になだれ込んだ。この軍隊には、ドイツに併合されたフィンランド軍とルーマニア軍も加わっていたため、実にその総数は320万もの大軍団となっていた。ちなみに世評でよく誤解されていることではあるが、ドイツ軍のソ連への攻勢は1941年と翌42年の前後2回にわたって行なわれており、最初の作戦に失敗した後にも態勢を立て直して再度の大攻勢を



敢行している。また、いずれの作戦においてもドイツ軍はよく戦い、劣勢に回って後も相当な抵抗を試みて少しずつ後退している。いたずらにヒトラー・ドイツの軍事力に肩を持つわけではないが、一つの体系的なまとまりをもった軍事組織がある程度の段階まで侵攻した状態は、それほど簡単に瓦解するものではないという事実認識を持つことは重要である。冬将軍が訪れるとすぐに雪崩のようにドイツ軍が本国へ逃げ帰ったかのような記述を好む早期退却観は、ヒトラー憎しの感情が、ドイツ軍をしてあたかも一網打尽に撃滅させられたように思いたいという各執筆者たちの人間的な願望が成せる技であろう。

ところで、この作戦の開始以前、日本の松岡外相はドイツを訪れた後、モスクワに立ち寄り、スターリンと中立条約を結んで日本へ帰っている。ドイツは日本に対してあくまで対ソ連戦を秘密にしていたため、ドイツのソ連侵攻は、松岡外相ならびに日本の政治中枢を動揺させた。かつて独ソ不可侵条約の締結に際し、「国際政治は複雑怪奇」との寝言を残して総辞職した平沼内閣に次いで、日本の政治家たちは、またもや呑気に驚いていたのである。また、スターリンも、たとえドイツの侵攻があっても、それは秋であろうと考えていたため、不意をつかれたソ連軍は総崩れとなり、開戦後の約1ヶ月でドイツ軍は500キロもソ連領内に侵入していた。ソ連では、スターリンの強力な指導体制の下、このドイツからの侵略に対する戦いを大祖国戦争と呼び、国民の緊張感と愛国心を高揚させて対抗した。有名なゾルゲ事件もちょうどこの頃に起こっている。これは、ソ連共産党のスパイであったドイツ人ジャーナリスト・リヒャルト・ゾルゲによってもたらされた日本の南進政策に関する情報、すなわち、日本は北シナからソ連に侵攻するのではなく、南シナから東南アジアへ侵攻するという軍事戦略を採択するという機密情報がもたらされたため、スターリンはその東部戦線の戦力（冬の戦闘に卓越した極東ソ連軍）をすべて西部戦線の対ドイツ戦に傾注させることが出来、そのため、ソ連が崩壊から救われたとされる事件である。この時、情報漏洩の仲介者として朝日新聞の記者・尾崎秀美は、ゾルゲとともに死刑となっている。

さて、秋から冬にかけても、ドイツ軍は、依然としてあくまでもモスクワへ向けて進軍していた。しかし、悪化の一途をたどる天候の下で、現地の司令官たちは作戦の継続について疑いを持つようになっていった。かつて地上最強を誇ったナポレオンの陸戦部隊ですら退けたロシアの厳しい冬将軍の到来により、冬支度のないドイツ軍は、次第に劣勢となっていった。ドイツ軍は頑強な抵抗を試みるも、物資の不足と兵器の不能は明らかで、冬の戦闘に慣れた極東ソ連軍の前に無力化していった。この時、ドイツ軍の機関銃は機能せず、車両は雪の轍に脚を取られて動かず、兵士たちは飢えと渴きを凌ぐためにガソリンをアルコール代わりに飲んで日々の戦闘を戦ったと言われている。この冬将軍の到来を待って、12月6日、ソ連軍は、新鋭の百個師団をもって一大逆襲を敢行し、ドイツ軍は数日間、大混乱を呈し、200キロあまり後退をせまられた。しかし、ヒトラーは、このような対ソ戦の苦戦にもかかわらず、翌日12月7日（日本時間8日）、同盟国である日本の陸海軍が真珠湾および南部仏印を攻撃したことを聞くと、それに呼応する形でアメリカへも宣戦布告した。この時、ヒトラーの「夢の終わり」が着実に始まったといえよう。

先に指摘したように、ドイツは翌42年に再びソ連に対して大攻勢をかけ、一時はソ連が世界に誇

る穀倉地帯として有名なウクライナあたりまで完全占領するが、結局、この戦闘は前年の繰り返しとなり、全体としての戦争の帰趨は動かなかった。ほどなくして、名将・パウルス将軍の率いるドイツ陸軍最強の第六師団が、有名なスターリングラードでの死闘を経て、ヒトラーの「街を死守せよ！」の命令を無視して全面降伏した。捕虜となった六万人のドイツ兵は、ソ連軍によって延々数十キロもの雪道を行進させられ、祖国へ帰還したものは約4000名にすぎなかった。このソ連が犯した悲劇的かつ膨大な数字は、日本軍の悪行と言われる「バターン死の行進」どころの比ではない。いずれにしても、この時以後、ドイツ軍は敗走を続ける一方となった。

かくして、1943年9月15日、ソ連軍がポーランド国境に迫りつつある一方で、連合軍によるドイツ本土への爆撃も日ましに増大の一途をたどっていった。当時、すでにヒトラーは54歳になっていた。1944年6月6日、アメリカとイギリスを中心とする連合軍は、史上最大の物量をもってフランスのノルマンディー海岸に上陸した。世界の超大国・アメリカの本格的な参戦である。ドイツ側は完全に不意をつかれ、8月末にはルーマニアの油田地帯をとられ、ドイツ軍の誇る機械化部隊の戦車や飛行機の燃料や物資が不足する状態となった。明けて1945年には、もはや東にソ連軍、西に連合軍の進撃を受ける状態となっていた。戦争の帰趨が不利になると呼応するかのように、1944年の夏の終わり頃から、ヒトラーは健康を害し、病床に伏すようになっていった。

1945年4月23日、ついにソ連軍は、ベルリンを包囲した。そして、27日には、ヒトラーのいる地下壕に狙いを絞ったソ連軍の集中砲撃が始まり、28日には、ソ連軍の主要な部隊はベルリンの中心部付近まで押し寄せていた。このベルリン攻防戦の最中、バドリオ元帥によるイタリアの降伏と、盟友・ムッソリーニ処刑のニュースを聞いたヒトラーは、遂に自殺を決意したといわれている。29日の午前1時、ヒトラーは、彼の異常なまでの愛情の重みに耐えかねて自殺した姪のゲリ・ラウバル亡き後、ヒトラーの精神的な支えとなっていた愛人のエバ・ブラウンと結婚し、翌30日の午前2時、総統官邸内の人々を一般食堂に集め、無言で一人一人に握手してまわった。その後、自室に帰り、間もなく部屋から鈍い銃声がもれた。ヒトラーは、毒薬を口に含むと同時に、愛用の拳銃で自らの頭を打ち抜き、妻のエバも毒を飲んで死んでいた。なお、この時、ヒトラーが密かにドイツを脱出し、アルゼンチンを経由して南極の秘密基地へ身を隠し、その後も生存していたという風説が流れたが、その根拠は歴史学的に見て薄弱なものであった。

今や、ドイツ国内のみならず、ヨーロッパ中が瓦礫の山と化し、『わが闘争』に示されたヒトラーの夢は費えた。それは、ゲルマン民族を中心とするアーリア人種以外の諸民族を奴隷化し、すべてのドイツ人は、その奴隷制度による生産力の上にあぐらをかいて王侯貴族のような生活を送るといふ誇大妄想的な夢であった。その後、1945年5月7日、ドイツは無条件降伏し、同年8月15日には、同盟国の日本も無条件降伏をし、第二次世界大戦は終戦を迎えた。

なお、ヒトラーは、ゲルマン民族の優位性を唱え、占領地におけるユダヤ人、スラブ人、精神異常者、同性愛者、体制反対派、そして、高齢者の虐殺を徹底しておこない、その数は、ユダヤ人だけでも600万人を超えといわれている。SSと秘密警察（ゲシュタポ）によって遂行されたこの悲劇的な愚行に対して、一部の論者は、ヒトラー自身の知らないところで勝手に行なわれた蛮行で

あり、彼に責任なしとする評価を下しているが、これはあまりにも本末転倒な評価である。政治体制の頂点に君臨する者であればこそ、もし部下の所業を知らなければ、それ自体が怠慢罪であるし、また、ヒトラー自身が知らないはずはなかった。なぜなら、こうした民族虐殺は、他でもないヒトラー自身の思想哲学の書『わが闘争』に明記され、予言されたおこないだったからである。

### 3. おわりに——政治家・ヒトラーの評価

ヒトラーはまぎれもなく20世紀を代表する最大の悪役政治家である。しかし、同時に彼は、オーストリア生まれの浮浪者からドイツの独裁者にまで上り詰めた現代史上の立志伝中の人物でもあった。実のところ、ヒトラーのように、一人の人間がその一生のうちに、いわば天国と地獄の双方を見るという希代な運命をたどった人物は、現代史のみならず、世界史上にもほとんど類例を見ない。たとえば、ヒトラー自身がこよなく尊敬した祖国の英雄・フリードリッヒ大王は、もともと先祖伝来の財産と地位を継承し、その身代を拡大させる作業を通じてヨーロッパの覇者となった王様であり、ヒトラーのように、何もないところから自己の組織を独創的に作り上げた人物ではない。

同様のことは、近代ヨーロッパの英雄・ナポレオンなどいえることであり、彼もまた、フランス陸軍の軍人としての階位を昇っていく過程で、後の世に覇者としての偉業を成し遂げていく基礎を見出した人物であるが、やはりその活動の母体は軍隊という既存の組織であった。また、同時代の独裁者として、ヨーロッパにその名を知られたスターリンも、ソ連共産党というレーニンが遺した巨大な遺産の上に自己の覇権を築き上げた。他にも、蒋介石には孫文が遺した国民党があり、毛沢東や周恩来の中国共産党はソ連共産党の指令と援助を受けた支部組織であった。スペインのフランコに至っては、まさに、そのヒトラーによって支援された近代的な軍事組織があった。また、ヒトラーの同盟国であったイタリアのムッソリーニは、国内の政治基盤を作り上げるところまではなかなかの政治的な手腕であったが、対外戦争が始まると、実際にはさしたる戦果を上げる力はなく、ほとんどヒトラー・ドイツのお荷物に成り下がってしまった。さらに、いささか時代は古くなるが、日本の事例でも、織田信長には父・織田信秀の所領が遺産として付与されていたし、豊臣秀吉もまた、主君・織田信長の遺産を継承して天下人になった人物である。

加えて、ヒトラーの出世は、あくまでも民主主義的な政治制度の中で正当な手法を用いて実現されたものであり、この点についてのみいうならば、ヒトラーの立志伝は、実に、世界史上においても特筆すべき稀少な事例としての意義を有するべきであったのである。

しかし、ヒトラーはあくまでも一国主義者であり、独裁主義者であり、人種差別主義者であり、民族の虐殺者であり、他国への侵略者であり、そして、戦争の敗者であった。もし彼が、ユダヤ人虐殺のような愚行を犯すことなく、また、世界戦争の趨勢を見誤ることなく、もっと上手に国際社会で立ちまわっていたならば、おそらくは世界の歴史は彼にもっと甘い評価を下していたかも知れない。しかし、事実はそうではなかった。なぜなら、こうしたヒトラーの一連の政治行動は、すでにその行動の源泉である彼自身の哲学思想の中に体系化されたものであったからである。彼の行動

指針の証拠である『わが闘争』は、今では世界中の誰もが読み、この事実を確認することができる書籍となっている。

また、ヒトラー政権の経済的基礎、すなわち、ナチス党による政治活動の資金源（パトロン）が、クルップやIGファルベンなどのドイツの独占資本であったことは有名である。したがって、彼のドイツ国民のための政策は単にうわべだけのものであり、その実、彼以前の政治家たちと同様にして、既得権益との利権を通じた癒着の中で行なわれたものであったことは否定できない。その意味でも、ヒトラーは真の「国民の英雄」ではなかったのである。

ちなみに、ヒトラーを語るとき、常につきまとう概念が、独裁というコンセプトである。一部の論者によれば、民主主義が衆愚政治に陥る危険性を有する以上、それを制限してもいた仕方がない状況が存在する場合があるという。そして、仮に独裁者であっても、彼または彼女の政策が国民にとって正しい(?)ものである限り、そのような民主主義の制限行為は容認されるべきであるとの見解がある。しかし、これは明らかに、恐ろしいまでの本末転倒な考え方であるといわねばならない。

まず端的に言って、独裁者たる絶対権力者の多くは、その権力に溺れて墮落し、国民のためになるような政策を遂行し続けることはできない。いわば、絶対的権力は絶対的に墮落するのである。なぜなら、反対勢力からの厳しい批判の目がなければ、人間がそのように墮落することは必定だからである。ヒトラーに限らず、人間などという動物は、所詮はその程度のものではないだろうか。

加えて、そもそも民主主義とは、ものごとを多くの知見にさらすことを通じて、国家や社会をより良い状態にするための方策を検討するという目的で作り上げられた政治制度なのである。このことから、少数エリート主義的な政策決定の究極形態ともいえるべき独裁が、いかに国家や社会に対して弊害をもたらすものであるのかは明らかである。独裁制は、独裁であること自体が政治的に悪なのである。

さらにいえば、できるだけ多くの人々が参画する政治過程の中で決定された方策の結果に対して、その過程に参画したすべての人々が責任を取るという合議制があつてこそ、人々は、その結果がたとえ自分たちの望ましいレベルに足りないものであったとしても納得し、次のステップへと平和的な手段を通じて駒を進めていくことができるのである。すなわち、民主主義制度は、それ自体が国家における社会秩序の基礎なのである。

人類史上におけるこのような巨大かつ重大な意義を有する制度を徹底的に破壊した独裁者として君臨したヒトラーは、やはり悪役政治家という位置付けから逃げることは永久にできない人物であろう。社会に難問が山積する時代が訪れると、大衆は常に強力な政治的リーダーにその責任と役割を任せたくなる人情にかられがちである。しかし、それは同時に、自分たちと自分たちの先達が数千年におよぶ歴史の過程で命を賭して獲得してきた神聖不可侵にして天賦自然の政治的権利を自ら放棄する愚行に他ならない。いかなる時代においても、いたずらに強いリーダーシップを求める傾向は、その意味で、厳として戒めなければならない風潮である。ヒトラーの人生とその時代は、歴史における反面教師として、我々に民主主義が独裁の温床となる危険性を教えてくれている。

## 注 釈

- (1) かつて「ヒトラー」の人名は「ヒットラー」と和文表記されることが多かったが、近年では「ヒトラー」で統一表記されているように思われる。  
アドルフ・ヒトラー (Hitler, Adolf)  
(1889年～1945年)  
ドイツ・ワイマール共和国首相・第三帝国総統
- (2) ヒトラーの伝記は膨大な点数にのぼるが、定番としては、村瀬興雄『アドルフ・ヒトラー：独裁者出現の歴史的背景（中公新書）』（中央公論新社、1977年）、三宅正樹『ヒトラーと第二次世界大戦』（清水書院、1984年）、村田豊文『第二次大戦とヒトラー』（あかね書房、1982年）などがある。なお、特に最近の業績として、阿部良男『ヒトラー全記録・20645日の軌跡』（柏書房、2001年）などは注目される。また、ドイツ人の手によるよく知られた文献としては、M・ハウスデン（吉田八今監修・清水順子訳）『ヒトラー・ある“革命家”の肖像』（三交社、2002年）、J・W・ベネット（山口定訳）『国防軍とヒトラー・新装版（1・2）』（みすず書房、2002年）などがある。また、20世紀を代表する2人の独裁者の対比研究を行なった近年の稀少な成果として、A・ブロック（鈴木主税訳）『対比列伝・ヒトラーとスターリン（全3巻）』（草思社、2003年）などがある。
- (3) ヒトラー自身の口述筆記による下記の文献は、あまりにも有名である。なお、筆記者は、姪のゲリ・ラウバルや後年に副総統となったルドルフ・ヘスなどであったと考えられている。A・ヒトラー（平野一郎訳）『わが闘争・改版完訳（上・下）』（角川文庫、2001年）
- (4) ヒトラー政権下のドイツ社会の動向については、山口定『ヒトラーの台頭：ワイマールデモクラシーの悲劇』（朝日文庫、1991年）、山口定『ナチ・エリート：第三帝国の権力構造（中公新書）』（中央公論新社、1992年）、三宅正樹『ドイツ現代史（第10版）』（東京大学出版会、1984年）などを参照せよ。また、ナチス・ドイツの歴史的な評価については、三宅正樹『ナチズム：ドイツ保守主義の一系譜（中公新書）』（中央公論新社、1986年）、望田幸男・三宅正樹（共編）『新版・概説ドイツ現代史・現代ドイツの歴史的 Understanding』（有斐閣選書、1992年）などを参照せよ。また、第二次世界大戦に至るまでの第三帝国の外交政策については、三宅正樹『日独政治外交史研究』（河出書房新社、1996年）、三宅正樹『日独伊三国同盟の研究』（南窓社、1975年）などを参照せよ。